岡山県立短期大学紀要　33巻1号　1～11頁（1989）

コールリッジ作「クリスタベル」のsupernatural

中　村　浩　路

1. 序　　論

コールリッジは「老水夫行」を書いたあとで"supernatural"な面をさらに徹底させた作品として「クリスタベル」の構想をたてた。Biographia Literariaの第14章の中で次のように述べていることは広く知られている。

"... In the one, the incidents and agents were to be, in part at least, supernatural;....

In this idea originated the plan of the 'Lyrical Ballads'; in which it was agreed, that my endeavours should be directed to persons and characters supernatural, or at least romantic ; yet so as to transfer from our inward nature a human interest and a semblance of truth sufficient to procure these shadows of imagination that willing suspension of disbelief for the moment, which constitutes poetic faith. ".... With this view I wrote the 'Ancient Mariner,' and was preparing among other poems, the 'Dark Ladie,' and the 'Christabel,' in which I should have more nearly realized my ideal, than I had done in my first attempt."

ただし残念なことに「クリスタベル」は第2部までで未完に終り，その後何回か残り3部を書き上げようと努力したが書けなかったことも周知の事実である。しかし我々の手許に残された667行の作品だけでも多くの事を読者に語りかけてくれる。

小論では特に"supernatural"な点がどのような言葉を用いて構成されているか，という面を取り上げて「クリスタベル」について論じてみた。その際，一見して平易な単語や句でも，その語句の背景（イメージ，シンボル，音声による連想，等）によりコールリッジがいかに"supernatural"な点を浮き彫りにしているかを明らかにするように努力した。

2. 本　　論

〔1〕深夜，満月の夜空に響く古城の時計

'Tis the middle of night by the castle clock, And the owls have awaken'd the crowing cock ; (1–2)[1]

小高い丘陵の上にそびえたつ古城の時計台から，周囲の森や集落に鳴り渡る鐘。「時」は真夜中の12時。クリスタベルを生み落すと同時に息を引き取った彼女の母親がどうしても聞きたいと願った娘の結婚式を告げる鐘の音である。

Christabel answered–Woe is me !
She died the hour that I was born.
I have heard the grey-haired friar tell
How on her death-bed she did say,
That she should hear the castle-bell
Strike twelve upon my wedding-day. (196–201)

しかしその結婚相手は両性具有の魔性の女ジェラルダインであった。彼女の耳にも12時の鐘の音が届いた。

I thought I heard, some minutes past,
Sounds as of a castle bell. (100–1)

そして，その結婚が，緑色の蛇（ジェラルダイン）に鳩（クリスタベル）が「犯される」形で行なわれるのを「夢」の中で見た吟唱詩人ブレイシーの耳にもその鐘は，聞こえた。

I woke; it was the midnight hour,
The clock was echoing in the tower (555–6)

新旧世代の交代を告げる結婚式を祝う鐘の音は「生」と「死」の両者を想い起させる。

『ハト（女神）は，その夫である男根を表わすヘビと交合して，性的結合と「生命」を表象した。「だから，ヘビのように賢く，ハトのように素直であれ」（マタイ伝，10：16）これはイエスの言葉であると考えられているが，イエスが思いつくままに喩えたのではなく，シリアの神や女神が，昔から，口にしていた祈りの言葉なのであった。そして，オリエントにおいてそれがどういう意味であったかは，ジプシーたちが

よく覚えていた。ジプシーの民話によると，祖先の霊魂は中空の魔の山の中に住み，男性はヘビに，女性はハトに変身している，という』[2]

12時を知らせる深夜の鐘の音がすべてのものの意識を呼びさます。詩の冒頭から全世界の支配者が「時」であることを我々にハッキリと告げている。

「1. 暗黒，死，冬　2. 悪，受動性，退行　3. 女性，豊饒　a. 太陽を征服し，強奪する情欲的な女　4. 聴覚，等」[3]を連想させる夜が「クリスタベル」の舞台である。

○ comfort-killing Night, image of hell,
（略）
○ hateful, vaporous, and foggy Night,
（略）
○ Night, thou furnace of foul reeking smoke! [4]

とシェイクスピアも歌った。

満月の夜空を背景に黒々とした姿を見せる城，クリスタベルの父が城主である。城は

「1. 侵略を受けない場所　2. 精神の注意力　3. 富，財宝　4. 時間の遡行を連想させるので，伝奇物語　5.（閉ざされた町として）天のエルサレムや超越霊　6. 権威，主権（丘に建てられると高さのシンボリズムによって強められる）　7. 出口のない迷宮のような現世，その他，美姫，清浄な騎士，頑丈な扉，酒宴，等」[5]を表す。

こうした諸々の連想を伴なう城に住みつき，「夜の魔女」と中世の人々に呼ばれたフクロウの声が夜空に無気味な反響をよぶ。フクロウにまつわる連想も，「夜」や「城」のそれをさらに増幅させる。

「1. 死，夜，寒さ　2. 魔女　3.「目の魔女」，凝視する目の持主　4. 予言と英知の持主」[6]

「クリスタベル」を書く時，コールリッジの脳裏を「マクベス」の次の行が去来しなかったであろうか。

It was the owl that shriek'd, the fatal bellman,
Which gives the stern'st good-night. (2. 2. 34–5)

このフクロウの呼び声に目をさまされたのは1行目のclockと韻をふむcockである。

「雄鶏には太陽―キリスト―が実際に上ってくる前に風見鶏の高さから見えるところから，霊的な啓示を表す。　3 b. 肉欲：雄鶏は中世では「姦通」Adulteryのシンボル（略）また近親相姦を表す。　4. 夜明けの鳥として以下のものを表す。　b. 光をもたらす者：比喩的にキリスト教徒，福音を説く人，　c. 雄鶏はあらゆる魔女や妖精を駆逐する。（「ハムレット」1. 1.）　5. 太陽の象徴。　6. 悪霊を追い払う。　7. 活動，闘い。　9. 復活。　10. 裏切り，懺悔，とくに翼をはばたかせた姿で描かれるときは，聖ペテロがキリストを否認したことを表す。（「マタイ伝」26：74以下）　11.（紋章）不寝番。　13. 時間。　20.〔民間伝承〕a. 雄鶏はキリストの誕生を告知した最初の生きもの。以来クリスマスには1晩中鳴く，　b. すべての雄鶏と教会の屋根にとりつけられている風見鶏は，世界の終末に際して，最後の審判を告げるために鳴くと言われている。」[7]

このように多様なイメージを呼びさます雄鶏が，ここではいかにも眠そうに鳴くだけである。光や夜明けをもたらしたり，魔女や妖精を追放するよりも，夜中に鳴き声をあげることで，時の関節が外れており，「夜の魔女」と呼ばれたフクロウの仲間であることを示す。

「クリスタベル」に出てくるフクロウはthe owlsと書かれており，長い間この城に住みついてきた数羽のものらしい。ここで一つ注意しておきたいことは，このフクロウたちの鳴き声をどのように印刷するか，という問題である。

(1) Tu—whit!——Tu—whoo!
(2) Tu—whit!———Tu—whoo!
(3) Tu—whit!————Tu—whoo!

(1)は，研究社小英文叢書の斎藤勇編のテキストから，(2)はThe Complete Poetical Works of Samuel Taylor Coleridge, ed. E. H. Coleridge (Oxford University Press, 1912 ; 1968 ed.)から，(3)は，Christabel, &c. by S. T. COLERIDGE,ESQ. 2nd ed. (Lodon : 1816)[8]の写真版から，それぞれ取ったものである。(3)は，コールリッジ自身が監修して印刷させたものと思えるが，「眼の圧制」(that despotism of the eye)[9]を重要視した彼だからこそ逆説的にこうした目に訴える印刷上の細かな点にまで気を配ったと想像される。[10]

ここで，冒頭の5行に内蔵された「聴覚」の働きについて少しふれておくことにする。

'Tis the middle of night by the castle clock,
And the owls have awaken'd the crowing cock;
Tu——whit!———Tu——whoo!
And hark, the crowing cock,
How drowsily it crew. (1–5)

全31語の内，12回も〔K〕の音が，満月とはいえ雲に覆われた深夜の空に響き渡る。

castle clock, awaken'd the crowing cock, hark, the crowing cock, crew

夜空にこだまする鐘の音，79行以下で語られるジェラルダインたちを乗せて疾走する白馬が火花を散らしながら大地をける蹄の音，その馬上に踊る5人の戦士

たちの武具の反響が一体となって鳴り渡る。

そして同時にそうした硬質な〔K〕の音で表現されるすべての物を取り巻く大自然（深夜の大気，城，フクロウ，眠そうに鳴く鶏，森と大地）を2重母音の〔ai〕，〔ei〕，〔ou〕や〔a：〕，〔u：〕，〔l〕，等の柔らかい音が包みこむ。

middle of night by the castle, owls, awaken'd the crowing, Tu, whoo, hark, again, How drowsily, etc

次に6行目で紹介される城の主人公は十字軍や教皇を想い起させるような名前を持った豊かな封建領主であるが，彼の飼っている番犬は「歯抜け」と形容される老犬である。この形容詞は病床に横たわる飼い主の現在の姿をも暗示している。

Sir Leoline, the Baron rich,
Hath a toothless mastiff bitch ; (6–7)

「イヌ〔好ましい特性〕1. 忠実な友，献身　b. 主人の墓番をする　d. 神々の忠実な友　e. 女性の足もとにうずくまる姿 ――忠実と用心深さ　2. 勇気，保護　e. 冥界の守護者　6. 太母神と月の女神の象徴　b. 月に向かって吠える

〔民間伝承〕2. 並みはずれた知覚能力を表す。すなわち，イヌは亡霊，魂，妖精，また死の天使を見ることができる。その際一般におびえた様子を見せるが，ときにみずから死の予告者となる。　3. 不吉さ，　a. とくに夜に吠える犬」(11)

このように数々の連想を伴うイヌではあるが，本来 "valuable as a watchdog" (SOD)と言われたmastiffも寄る年波には勝てず，主人同様，無力な存在になっていることが強調されている。しかし上の民間伝承に伝えられるような神秘的な能力は失われてはいない。女性原理の支配する「クリスタベル」の世界にふさわしくこの犬もメス犬である。彼女は，城の時計に答えて夜空に吠える。しかも夜だけではなく次に表現されているように常に吠える。

Ever and aye, by shine and shower (11)

Ever and ayeは別として，by shine and showerは最初は，moonshine or showerとか by shine or showerのように"or"を用いた二者選択一的な形式であった(12)。慣用的には rain or shine であるが，コールリッジは限定的な表現から頭韻を用いたものへ，さらに「時」の連続性，展開，継続，重層性，緊密性，等を強調する "and" を用いたこの表現に決定したものと思える。ちなみに「クリスタルベル」の中で，文頭に用いられた "And"は全678行の中で120回，上の11行に見られる形式が103例にも及んでいる。要するにコールリッジがこれほど and をこの作品で多用したのは次のような理由が考えられる。

① 中世のBallad風なstyleの口調をだす→語りつつ言葉を継ぎ足していく
② 導入→展開，継続→期待感
③ 積み重ね→複雑さと多様性
④ 物語の進行→前へ前へと押し進める力→緊密さと豊かさ→融合と包括
⑤ 全てに開かれている状態

〔2〕6行目から13行目までに続みとられる「時」のテーマ。

年老いたメスの番犬（7行目）→神が創造した最初の固形物「地の骨」であり「不変性」の象徴であるrock（8行目）→それと韻をふむclock（9行目）→10行目のthe hour→どちらも"always", "at all times"の意のOE系のever と ON系 ayeの組み合わせの後に出てくる shine and shower → howls → loud, そしてSome say, she sees my lady's shroud（13行目）のshroudへとつながれて，「時」のテーマの中心を成すとも言える「死」のテーマが現れる。

イヌは「並みはずれた知覚能力をもち，亡霊，魂，妖精，また死の天使を見ることができる」とあったことを思い起しておきたい。

ついでにここにつけ加えておくが，ジェラルダインにもそうした一種の超能力が与えられているようである。

Alas ! what ails poor Geraldine ?
Why stares she with unsettled eye ?
Can she the bodiless dead espy ? (207–209)

〔3〕自　　然

次の14行目で自然に関する詩人の問が発せられ，それに答える形で物語が進められる。

Is the night chilly and dark ?
The night is chilly, but not dark.
The thin gray cloud is spread on high,
It covers but not hides the sky.
The moon is behind, and the full ;
And yet she looks both small and dull. (14–19)

『月は，一般に，基本的なシンボルとして相反する価値，すなわち女性と男性，液体と揮発性，節操と無節操などを表す。

〔神話〕では女性も男性も表す。さらに，死者のすみか，母性，狂気，魔術，亡霊の出現，聖書においては死の不可避性，凌辱，結婚，死「マクベスのダンカン

王は月が沈んだ後に殺害された。cf. The moon is down. (2. 1.)」，災い，沈黙，音楽，を表し，キリスト教では聖母マリアおよびキリストの光を反映する教会を表す。さらにコールリッジの「老水夫行」はSir Patrick Spensのthe new moonを用いて「嵐の前兆」としていたことも思いあわされる。諺にはThe full moon brings fair weatherとある』(13)

こうした事件が展開されている「クリスタベル」の舞台は「中世」という「過去」であり，季節はチョーサーの「カンタベリー物語」やその他，中世の春の歌が始まる4月である。しかし今年は何故か「春の訪れ」がおそい。「時」の枠組のどこか狂っている。したがって下に述べる5月にまつわる伝承が4月に現れる。（白馬に乗せられて掠奪されたジェラルダインと5月の女王の話を参照）

'Tis a month before the month of May,

And the Spring comes slowly up this way.(21–2)

5月とは『未婚の男女が密通する月であった。5月は16世紀までヨーロッパではどこでも性の自由がある「密月」とされていた。……だが「5月の騎乗」と呼ばれる行事には神聖な結婚の儀式の痕跡が見られた。このときは，白いウマに乗った5月の女王と，黒いウマに乗った女王の伴侶が先頭に立って，そのあとに騎士と貴婦人が2人1組になって森へウマで出かけた。女王とその連れはフレイとフレイアを表し，この2人の結合は毎春の豊饒の魔法となった。5月祭の宵祭りは「魔女の」春の大祭で，ちょうど1年の反対側にあるハロウィーンに相当する。（略）神の男根は5月柱の形になって，大地の子宮に差し込まれた。5月柱は本来ヨーロッパのものではなく，今も「大男根」とされているインドからの直接的借り物であった。（略）若い男も，未婚の女も，年をとった男も，既婚の女も，森，丘，山へ向けて夜通し走り回る。森や丘から自分たちの集いを飾るカバの木の枝を持って朝帰ってくる。それに驚くことはない。遊戯と気晴らしの監督である王として，偉い領主がおでましなのだ。すなわち地獄の王のサタンである。（略）若い男や乙女たちは森へ出かけたが，見てきた人の言葉に従えば，「汚されずに」帰ってくるものは少なかった。（略）当然，教会はこの宗教的祭典に反対した。7世紀にノヨンのエリゲウス司祭は，改宗者に5月祭の性的儀式を行なうのを止めるように懇願したが，成功しなかった。1,000年経っても，この月はまだ「魔女たち」に捧げられていた。17世紀のトレヴの教会の鐘は「空とぶ魔女たちから町を守るため」に5月中，夜を徹して鳴らされた』(14)

こうした春の深夜の森に我々が見いだすのは主人公クリスタベルである。

The lovely lady, Christabel,

Whom her father loves so well (23–4)

ここでクリスタベルの形容詞として用いられたlovelyはSODでは次のように定義されている。

2. Lovable ; having qualities that attract love OE.

3. Lovable on account of beauty ; beautiful. Now emotional sense : Exquisitely beautiful. ME.

b. with ref. to moral or spiritual beauty 1805.

したがって単に外面的な美しさを強調するものではないことが示されている。しかもクリスタベル自身の名前がBeautiful Christianの意味や，A radiant-faced one who believed in Christian precepts の意味であったことも思い出しておきたい。さらにいえばChrist + Abelの響きもかくされているであろう。ちなみに，ジェラルダインはBeautiful exceedingly！ (68) と形容されているが，そうした彼女の名前には次のような意味がある。Gerald＜OHG. Gērwald, lit.'spear wielder'＞に女性形'ine'がついたものである。まさに「名は体を表す」である。

これら2人の女性が相合うのは，古来から魔界に属するとされた森であった。

「Wood 1. 木は母なるシンボル　2. a. 昔の豊饒儀式と共感魔術による結婚と誕生の舞台である。　b. 人間の一番最初の神殿　c. 魔法と関連」(15)

さらに，'out of one's mind, insane, lunatic'や'Heere am I, and wood within this wood, Because I cannot meet my Hermia'などのシェイクスピアの「真夏の夜の夢」で用いられた形容詞の用法も思い出される。同じようにforestも次のような連想をともなう。

「女性原理，太母　a. 管理，開懇のおよばぬことから，理性や知性の外にあるものを表す。　b. 大地のシンボルであり，太陽の反対物，　c. 無意識：森の中に潜む恐ろしい物や怪物は，無意識の危険な側面を表す。2. 隠れ場所　3. 狩猟　4. 無法者のすみか，男女の交わりの場，　5. 妖精や精霊が住む場所，ダンテ＜地獄篇＞暗黒の森は，誤謬と眠りの森であり幻想界へ入ることを表す」(16)

ジェラルダインがこの森へ拉致されて来た時，彼女は無意識（一種の仮死）＜entranced (92) ＞な状態であった。そもそもクリスタベルがいくら婚約者の身の上を思った結果であるにせよ，その祈りの場所に城中の礼拝所でなく深夜のしかも城から200メートルも離れた森の中を選んだのは，すでにジェラルダインの魔

力の働きが及んでいるからであろうか。

クリスタベルが祈りをささげた場所は次のような場所である。

And nought was green upon the oak
But moss and rarest misletoe :
She kneels beneath the huge oak tree,
And in silence prayeth she. (33–6)

春に関連して，「期待，希望を表し，キリスト教では，救済の希望，復活，死の克服，悪との不断の戦いを表す」(17) ミドリの物は，苔，寄生木，オークの3つである。

初めて言及されるにもかかわらずこのオークには定冠詞がつけられていることから，数ある中でもきわ立って巨大な有名なものとして描かれている。オークとは，そもそも，

「2. 力を表す，　a. 枝は天まで達し，根は太くて冥府の下のタルタロス(Tartarus)にまで達している。3.（常緑樹であるために）長寿，不死を表す　7. 転換点，世界軸，扉を表す」(18) さらに 'dragons and snakes' との関係も指摘されている森の王者である。(19)

その王者に従う苔は

「母の愛，庇護のための覆い，謙譲，奉仕，友情，そして寄宿者を表す」(20)

寄生木の方は

『一般に大ブリテン島ではふつうはリンゴの木に生育し，オークの木に生育するのはまれであるが，ヤドリギと関連のあるのはたいていオークの木で，この木に成育しているヤドリギが一番珍重される。　2. ヤドリギは，オークの生殖器で，その実の液はオークの精液であり，再生力がある。　3. 豊饒のオーク王の死と関連がある。　a. 冥界を訪れるアイネイアスは安全に地上に戻れるように，ヤドリギを持って行った。5.（象徴）　a. 不滅　g 魔法：魔法を行なうのにうってつけの陰うつな森は「青苔と毒のあるヤドリギにびっしりとおおわれている」"Overcome with moss and baleful mistletoe" (Tit. And. 2. 3.)と描写されている。　6.〔民間伝承〕　c.「ヤドリギの下のキス」(the kissing under the mistletoe)は英国特有の習慣で，ヤドリギの下に立っている女の子はキスされても仕方がない。「かつてはオークの木の神の儀式につきものであった性の狂宴の名残りである」』(21)

〔4〕時制と代名詞の問題

クリスタベルは足音を殺して無言で森の中を歩んだ。ひそかにもれるため息の音。目に入る緑は上述のように冬を思わせるほどわずかしかなかった。夜の森の中で風の音が全然耳に入らないのも不思議だが，古い版では

The breezes they were whispering low (32)
The breezes they were still also (32)

の2種類あったのが現在のように変えられたのである。(22)

低いにしても森全体を吹き渡る風の音に比べれば，ため息の音が強調する静けさにはかなわない。しかも31行から34行までは「過去時制」によって表現されているがそれに続く次の数行には特に「時制」の微妙な工夫がこらされていることに注目したい。

She kneels beneath the huge oak tree,
And in silence prayeth she.
The lady sprang up suddenly,
The lovely lady, Christabel!
It moaned as near, as near can be,
But what it is she cannot tell.—
On the other side it seems to be,
Of the huge, broad-breasted, old oak tree. (35–42)

古い版では，kneelsはkneltとなっていて祈るところだけが劇的現在で表現されており，さらに次のスタンザのsprangもleapsになっていた。それが今のようなテキストに改められたのは，ひざまずいて祈る動作を一連のものとしてとらえて目前で流れるように起っている運動を強調しているからである。その後しばらく静かな祈りが続けられた事を表すためにも，ここは「過去時制」にもどす方が時間の経過を際立たせるのに好都合である。そして，とび上った理由を述べる文となるが"moaned"の主語がItになっているのは何故か。

"Referring with slight demonstrative force, to person, thing, circumstance, event, action, which one has in mind, or which is under discussion, whether already, or about to be expressed, or merely implied" [UED,it(1),pron. 2]

とあるように，語り手が我々聞き手もこの語が何をさすか自明のこととしているからである。まさに語り物（中世のBallad風物語）が話される"場"と雰囲気を創りあげる絶妙な工夫である。これにより両者の間の一体感，親近感が強められると同時に，本当はまだ知らされていないその正体についての期待感が一層高められる。しかもこの詩行の工夫は代名詞のそれと組み合された時制の用法にまで及んでいる。この行のcanも古い版ではcouldであったものがある。(23) しかし現在のテキストに従えば，過去の事実としての「ウメキ声」が過去の世界から現在の世界へとつながり，そのあま

りにも生々しい苦痛に満ちた経験を我々も否応なしに共感せざるをえなくさせられる。

〔5〕オークの彼方の世界

しかしクリスタベルはすぐに「オークの裏の世界＝異界」へは入らないで，一種の自然が催す儀式を経験しなければならない。すなわち風による円・回転運動をくぐり抜けるのである。44，45，48各行のwind, 45行目のair, 46行のringlet curl, 48行のtwirl, 50行のdance等の各語に注意。

『「恍惚感，詩的霊感，神託的霊感（をよびおこすもの）1. 木の葉（とくにオーク）の間を吹く風は，一般に神託的だと考えられている。 2. コールリッジ（「老水夫行」）においては，風は淀んだ静けさと対極をなす。気力のない惰性とは対極的に，風は創造的衝動，つまり霊感に憑かれて恍惚としているさまを表す。〔生命力，精神〕 1.〔略〕風は，生物界と超自然的存在とが共有しているものであるから，魂を表す。旋風は，しばしば神の顕現を伴う。（略）〔破壊，神の怒り，危険〕，〔狂気〕，等々』を表す「風」[24]

我々の視線は，たった1枚，樹の天辺高く，軽く「踊る」真紅の葉から，さらに中天へと高く高く垂直に上昇していく。まるで冬を思わせる早春の森で薄暗い夜空を背景に，赤い1枚の葉が見える不思議。しかもその葉はthe last of its clan (49) と表現されたことで，中世のイングランドとスコットランドの辺境地帯という“場”が強調され，clanがGael語に由来するものであることも思い出させる。また，滅びていく種族から“死”のテーマにも関連するが，木の葉を緑ではなく赤色に特定したことにも神秘的かつ不吉な様々な意味が読みとれる。

回転・円運動の円は「1. 永遠，天国，完全， 2. 全，天球 3. 周期 4. 女性原理 5. 円周，を表す」[25]が，そうした円 を思わせる動きに沿って中天高く舞い上った我々の視線は，クリスタベルの心臓の鼓動の音によって，オークの根元にいるクリスタベルへと注がれる。

ここで，我々の気持を落ちつけて，さらにサスペンスを盛り上げるかのように再び時制が過去へと帰る。そして別世界へ入る扉を通り抜ける動作を象徴するかのように「巾広い胸のオーク」をぐるりと廻り，足音をしのばせて，ジェラルダインの待つ「現在時制」の世界へクリスタベルが入ってくる。

What sees she there？ (57)

4語すべてにストレスがおかれる。このseesの用法については，G. N. Leechが「意味と英語動詞」のE. a. で述べている説明が暗示的である。

「“I see a bird！”＜鳥だ！＞は現在の瞬間的用法の1例であり，“I catch sight of a bird！”＜鳥を見つけた！＞とほとんど同じ意味である。この場合もほかの場合と同様に，瞬間的用法は余り普通でなく，芝居がかっている(melodramatic)」[26]

異界に入ったとたんにクリスタベルが目にしたものは一体何であったか。後で裸のジェラルダインを描写する時のように，聞き手の側にも普通の世界の存在を期待しているわけではない。

There she sees a damsel bright,
Drest in a silken robe of white,
That shadowy in the moonlight shone : (58–60)

“bright = 1. Shining ; emitting, reflecting, or pervaded by much light 3. Of persons : ‘Resplendent with charms’(J)”(SOD) とあるように，目もくらむような魅力に包まれた高貴な生れと思える女性である。さらに彼女が身にまとうのは「純白の絹のローブ」である。

「純潔，聖性，光明，永遠なる生命，尊厳，等のプラスの意味と同時に，死，魂とか生命の霊や一般に魔性の女の色」[27]である白色。その白いローブが淡い満月の光の中で，亡霊のように浮かびあがる。力と頑固さを示す堂々とした(stately)彼女の首は，彼女の真白な絹のローブを“wan=unnaturally pale, esp. from sickness, grief, etc.”に見せるほど気味悪い白さである。

The neck that made that white robe wan,
Her stately neck, and arms were bare ;
Her blue-veined feet unsandal'd were,
And wildly glittered here and there
The gems entangled in her hair. (61-5)

むきだしの腕は「救い」を表すというが，ジェラルダインの場合はどうであろうか。

“The Lord hath made bare his holy arm in the eyes of all the nations ; and all the ends of the earth shall see the salvation of our God.” (Isaiah, 52. 10)

足の血管は高貴さを表すblue-veinedであるがサンダルははいていない。“go without sandals”とは，貧困，服喪を表す[28]と言われるが，現在ジェラルダインの置かれたアンビヴァレントな立場がこうした点にも表わされている。さらに髪の毛に飾られた宝石も何となく無気味な輝きをあたりに放つ。魔性を表し始めた時のジェラルダインの様子の先ぶれともとれる。

Again the wild-flower wine she drank :

Her fair large eyes 'gan glitter bright,
And from the floor whereon she sank,
The lofty lady stood upright :
She was most beautiful to see,
Like a lady of a far countrée. (220–5)

余りに美しく豪華な衣装をまとったこの女性を目の前にしたクリスタベルは，本能的に危険を察知して，聖母マリヤの庇護を求める。そしてこの女性に次のようにたずねる。

Mary mother, save me now !
(Said Christabel,) And who art thou ? (69–70)

それに答える貴婦人の声は弱々しい。

And her voice was faint and sweet :—(72)

まさに，中世演劇に登場する悪魔の「ささやき声」である。そして76行目の"How camest thou here ?"というクリスタベルの問にたいする答の中で初めて自分の名前や身分を明かす。この返答の中で興味深いことが2つ語られる。1つは，彼女が「昨日の朝」5人の「戦士」に捕えられて，無理矢理に白い馬にしばりつけられて森（共感魔術による結婚の舞台）へつれてこられたこと。

Five warriors seized me yestermorn,
Me, even me, a maid forlorn :
They choked my cries with force fright,
And tied me on a palfrey white.
The palfrey was as fleet as wind,
And they rode furiously behind. (81–6)

さらにもう1つ。朝から晩まで風のように馬を走らせ続けて，太陽の支配する世界から月の支配する世界を横切ってきたこと。ただし馬から降ろされてからの時間の経過については，彼女自身が気絶していた状態（時間の支配を受けない仮死の世界）にあったので，全然分らない，ということである。

They spurred amain, their steeds were white :
And once we crossed the shade of night.
As sure as Heaven shall rescue me,
I have no thought what men they be ;
Nor do I know how long it is
(For I have lain entranced I wis)
Since one, the tallest of the five,
Took me from the palfrey's back,
A weary woman, scarce alive. (87–95)

さらにジェラルダインが馬からおろされたのが巨大なオークの根元であったことの意味も大変象徴的である。5人の戦士に置き去りにされた後で，彼女は城の時計の音（やがて結ばれるクリスタベルとの結婚を祝う鐘の音であり，そのことによりジェラルダインが犯す罪，いわば一種の精神的死にたいする弔鐘とも考えられる鐘の音）を耳にしたように思う。

I thought I heard, some minutes past,
Sounds as of a castle bell. (100–1)

〔6〕城内の2人

ジェラルダインに同情したクリスタベルは皆が寝静まった城へ彼女をつれて帰ってくる。そして城へ入る前にジェラルダインに向かってクリスタベルは次のように告げる。

All our household are rest,
The hall as silent as the cell ;
Sir Leoline weak in health,
And may not well awakened be,
But we will move as if stealth,
And I beseech your courtesy,
This night, to share your couch with me. (116–122)

117行目のcellは"A small room, smallhouse ; part of larger chamber separated off by dividing partition, Various specific meanings : a. a room for one person in a monastery, nunnery ; b. hermit's one-roomed dwelling ; c. small monastery or nunnery dependent to a large house ; d. small compartment in a prison in which a single prisoner is kept. e. (poet) the grave, 'Each in his narrow cell for ever laid'(Gray) (UED, cell, 1)のような色々な意味が響き合っているが，特に"the grave"のそれは次の行からもコールリッジの頭にあったと思って間違いない。

Sweet Christabel her feet doth bare,
And jealous of the listening air
They steal their way from stair to stair,
Now in glimmer, and now in gloom,
And now they pass the Baron's room,
As still as death, with stifled breath! (166–171)

いよいよmoat→door→gate→threshold→hallの順番に城内へ入っていく。外堀を渡る。次に，かつて威風堂々と軍隊が出入した頑丈な鉄張りの門にたどりつく。

「gate（略） 2. 扉と同じ機能がある。
a. 生と死を分かつ門 b. 天国の門 c. 善と悪を分かち，永遠の生へ続く門は狭く，その道は細い（マタイ伝，7.14） 3. 力，要塞を表す 4. 判断の場として公正を表す，等々」[29]

「door　1. e.キリスト教では，死，とくに殉教によって神の王国，天国の喜悦への道　2. 外側からの危険を防ぐ遮蔽物，防護物：聖書には，超自然的な力を追い払うために，戸口を魔術的手段を使って補強する方法がたくさんあげられている。」(30)

「threshold　1. たとえば眠りから目覚め，生から死，信仰から瀆神，意識から無意識などの存在の諸段階，諸状態への移行を表す。　3. 敷居の神々は強大な力がある。」(31)

魔界の住人であるジェラルダインは人の助けを借りなければ敷居を越えて住居へ入ることは不可能とされている。

They crossed the moat, and Christabel
Took the key that fitted well ;
A little door she opened straight,
All in the middle of gate ;
The gate that was ironed within and without,
Where an army in battle array had marched out.
The lady sank, belike through pain,
And Christabel with might and main
Lifted her up, a weary weight,
Over the threshold of the gate ;
Then the lady rose again,
And moved, as she were not in pain. (123–134)

ようやく広間へ入ったクリスタベルの次の言葉ほどdramatic ironyに満ちたものはないであろう。悪と精神的死と罪の世界への門を自から開いてしまったのである。

Praise we the Virgin all divine
Who hath rescued thee from thy distress !
(139–140)

2人がさらに奥へ進むと同時に，戸外の番犬は眠ったままで怒りのうなり声を発するが「亡霊，魂，妖精，また死の天使を見ることができる」鋭い知覚能力を持つ事を思い出しておきたい。暖炉の側を通りかかると，「生命力，浄化，警戒，至高神，知恵，魂，慈愛」を表すflame,「清めと浄化の力を持ち，邪悪な魔力を滅すために用いられ，霊的な覚醒および宗教的な熱意を象徴し，発語，言葉」を表すfireが，聖書に頻出する「燃える御言葉」，「火の弁舌」のイメージを表す“A tongue of light, a fit of flame” (159) となって燃え上る不思議が起る。(32)　ここでの tongue は“A tapering jet of flame”(OED), “a thin, long, narrow flame”(UED)の意味と，“In ref. to speech. 1. Considered as the principal organ of speech ; hence, the faculty of speech ; voice, speech ; words, language OE”(SOD, II)の2つの意味が重ねられていて，眠っていても異変を伝えようとする犬と同じように，「伝達」をしようとしても思うにまかせぬ「伝達不能」を象徴している。同じことが次の‘a fit of flame’についても，炎が異変を知らせようと一種の身もだえ，“b. uncontrollable, sudden, acute or access of any bodily affection 2. (fig) a. Passing whim or impulse” (UED)をしていて，これは「クリスタベル」の底流である「言葉による伝達不能」の神秘的な表象とも受けとれる。

〔7〕 奪われた言葉

Her silken robe, and inner vest,　250
Dropt to her feet, and full in view
Behold! her bosom and half her side ——
A sight to dream of, not to tell !
(254–259 略)
Then suddenly, as one defied,　260
Collects herself in scorn and pride,
And lay down by the Maiden's side ! ——
And in her arms the maid she took,
Ah wel-a-day !
And with low voice and doleful look
These words did say :
‘In the touch of this bosom there worketh a spell,
Which is lord of thy utterance, Christabel !
Thou knowest to-night and wilt know to-morrow,
This mark of my shame, this seal of my sorrow ;　270
But vainly thou warrest,
For this is alone in
Thy power to declare,
That in the dim forest
Thou heard'st a low moaning,
And found'st a bright lady, surpassingly fair ;
And didst bring her home with thee in love and in charity,
To shield her and shelter her from the damp air.’
(250–277)

250～251行は過去時制であるが，全裸でクリスタベルの眼前に現れた肉体の余りに奇怪で無気味な姿に詩人が思わず知らず“Behold !”と叫んだ所から261行までは劇的現在で表現される。252行から253行にかけてのテキストの変遷，255行から261行が現在のテキストになるまでの多くの版での省略等については，E. H. Coleridgeのテキストにつけられたノートを参照して頂きたい。

255行から259行に至るジェラルダインの逡巡する姿は，彼女が通り一遍の悪魔役でない事をうかがわせる貴重な描写である。そうした己れの弱さを軽蔑し誇りを取り戻した後で，決定された行動に移る所から過去時制の描写に変る。そしてそこでクリスタベルがどのような状態に置かれ，何がおこなわれたかは，次のような部分を読めば我々も否応なしに納得せざるをえない。

A star hath set, a star hath risen,
O Geraldine ! since arms of thine
Have been the lovely lady's prison.
O Geraldine ! one hour was thine ——
Thou'st had thy will ! (302–6)

ジェラルダインの愛撫する両腕は，クリスタベルを収容する牢獄であり，与えられた1時間でジェラルダインは"思い"をとげた。

"will=+2. Carnal desire or appetite: =DESIRE sb. 2. / 3. transf.
(chiefly as obj. of *have*): That which one desires, (one's)'desire'. Now *arch.* or *poet*." (OED, Will, sb, I)

「星が沈み，星が上る」夜の間に行なわれた行為は，"rape"を含んだ"rapture"(467)であった。そして腹の底からしぼり出された嘆きの声は，単語としてはわずか2語にすぎないけれど，それで1行を成し"Ah wel-a-day !"と4つの"accent"がおかれる。(33)

引き続き266行の4語全部にもアクセントが置かれたあとのジェラルダインの言葉は一挙に10語の詩行になる。267～270の4行は前後を短い行にはさまれ，その上，内容的にも決定的に重要な意味を持つ部分であり，コールリッジの非凡な工夫がうかがわれる。John Colmerの次のような評言がピタリとあてはまる。"metrical change to suggest the incantatory spell"(34)。「母性」を象徴するはずの胸にふれることにより"utterance=the ability to utter"を奪われ，"spell = An occult or mysterious power or influence ; a fascinating or enthralling charm 1592." (SOD, 3. b. *transf.* and *fig.*) により真実を自分の言葉で語る能力をクリスタベルは失う。以後，クリスタベルはジェラルダインの本性を見抜けない父に真相を伝えようと必死にもがくがそれも出来ない。

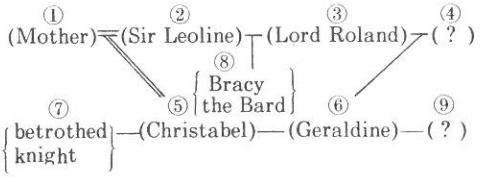
'What ails then my beloved child ?'
The Baron said---His daughter mild
Made answer, 'All will yet be well !'
I ween, she had no power to tell
Aught else : so mighty was the spell.
(470–4)

...and more she could not say :
For what she knew she could not tell,
O'er-mastered by the mighty spell. (618–620)

しかしこのような伝達能力を封じられたクリスタベルを救っているのは，ジェラルダインとそのような関係を結んだことに対する明瞭な罪の意識である。

'Sure I have sinn'd !' said Christabel,
'Now heaven be praised if all be well !' (381–2)

クリスタベルとジェラルダインを中心にして，主な登場人物の関係を一覧表にしてみると非常に興味ある事実が浮かび上ってくる。



クリスタベルの母①は死亡しており，したがってSir Leolineは妻がない。ジェラルダインの母，すなわちLord Roland③の妻④については何の言及もされていない。もちろんジェラルダインは普通の女性としては描かれていないで，むしろ母と娘をかね備えたような点もある。

And lo ! the worker of these harms,
That holds the maiden in her arms,
Seems to slumber still and mild,
As a mother with her child. (298–301)

母のないジェラルダインは初めのうちは，クリスタベルの母が自分に同情してくれるかどうかを心配する。

'And will your mother pity me,
Who am a maiden most forlorn ?'

さらに続けて，クリスタベルの守護神の役目を果す母の霊に思わず知らずmother と呼びかける。しかしそうした弱さを追い払うかのように軽蔑的なwomanという語に言いかえるが，「母性」にたいする複雑な感情がかいま見える印象的な言葉である。しかもこのwomanはクリスタベルが父にジェラルダインを追放してくれ，と頼む時に使用されることにより，一層そのironyが強められることになっている。

O mother dear ! that thou wert here !'
'I would', said Geraldine, 'she were !'
But soon with altered voice, said she---
'Off, wandering mother ! Peak and pine !

I have power to bid thee flee.'
Alas ! what ails poor Geraldine ?
Why stares she with unsettled eye ?
Can she the bodiless dead espy ?
And why with hollow voice cries she,
'Off, woman, off ! this hour is mine—
Though thou her guardian spirit be,
Off, woman, off ! 'tis given to me. '
(202−213)

'By my mother's soul do I entreat
That thou this woman send away !' (616−7)

このような母性に対して父の方はどうであろうか。②，③の両者は若い頃は無二の親友であったが，その後仲違いして疎遠な間柄になったままである。しかもかつては威風堂々とした(tall)騎士であったクリスタベルの父も今は健康がすぐれぬ上にジェラルダインの本性も判断がつかぬような状態である。ついには，文字通り掌中の珠のように愛していたクリスタベルを捨てて，ヘビのような悪魔性をむき出しにし始めたジェラルダインを自分の娘の位置にすえるという大きな過ちを犯す。

And turning from his own sweet maid,
The aged knight, Sir Leoline,
Led forth the lady Geraldine ! (653−5)

人物関係の図で，ジェラルダインの母にあたる④，恋人にあたる⑨は，作品の中ではどこにも言及されていない。そもそもこの両者は，図の左半分にならって対照的に私が書てみたものにすぎない。それでは何故ありもしない④や⑨を創造したのかといえば，そこに相当する人物がどこかにいないかどうか，考えるヒントにするためである。結論を言ば，ジェラルダインにとっての⑨に相当する人物は⑤のクリスタベルであり，④に相当するのは①のクリスタベルの母であり，さらに②＝③の関係になるのは上に見た通りである。

こうした親子関係の複雑さを一番顕著に示しているのがクリスタベルの父である。527行以下で詩人ブレイシーの語る不思議な夢では次のようなことが起る。

クリスタベルの父が飼う，愛娘と同じ名前をつけられたハトが緑の森の中でヘビに襲われる現場を見る。夢からさめると夜中の12時で，城の時計が鳴っていた。音楽の力で呪われた森を清めたいと言う。それに対するクリスタベルの父の返事は次のような奇怪なものである。

Thus Bracy said : Baron, the while,
Half-listening heard him with a smile ;
Then turned to Lady Geraldine,
His eyes made up of wonder and love ;
And said in courtly accents fine,
'Sweet maid, Lord Roland's beauteous dove,
With arms more strong than harp or song,
Thy sire and I will crush the snake !' (564−571)

Christabel=dove=Geraldine=snakeとなったわけである。

このあと，どのような構想にしたがって物語を展開するつもりであったのかその成行に興味をそそられるが，残念ながら未完に終ってしまった。

3. 結びに代えて

第1行目の「時」のテーマが，鍾の音にのって，結婚を祝し，死者をとむらい，さまざまな変奏をかなでる。子供が生れ，母が死に武勲をたてた父は病の床に伏し，代りに娘の恋人の騎士が遠い異国で戦う。『詩においては，時間の共鳴ともいうべきものによって，世界が我々にさし出される。というのはひととおりしかない時間がこのように律動的に進んで行くことによって，あらゆるできごとが同じ歩調で進み，我々についてくるからである。そこにあらゆる詩の道具立が現われるのであり，それは泰然自若として生成する世界そのものにほかならない。この広大な宇宙の中に我々の不幸が適当な位置を占め，そこによって我々は，自分の運命がこれ以外にはあり得なかったと感じるのである。「イーリアス」の中には戦闘があり，死者があり，埃があり，怒りがある。しかし詩人はこう語る。「それは樵夫が高い山で食事の仕度をする時刻であった，……」この同じ時刻ということがわれわれの心を捕えるのだ。』[35] さらにコールリッジがどの程度「民間伝承」を意識していたか分ればさらに面白いであろう。

Notes

(1) Ernest Hartley Coleridge : The Complete Poetical Works of Samuel Taylor coleridge, Vol. I : Poems, Oxford University Press, (1912) (以下 E. H. Coleridge と略記)

(2) バーバラ・ウォーカ著・山下圭一郎他訳，「神話・伝説事典」大修館 (1988)，pp. 506−8

(3) アト・ド・フリース着，山下圭一郎他訳「イメージ・シンボル事典」大修館 (1984) p. 405 （以下「イメージ」と略記)

(4) The Rape of Lucrece, 11. 764－799

(5) 「イメージ」 p.109

(6) 同　上，pp. 476－477

(7) 同　上　pp. 135－137

(8) 野上憲男氏（倉敷市立短大）の御好意による。

(9) J. Shawcross(ed) : Biographia Literaria by S. T. Coleridge, ch. vi. O. U. P., (1969)

(10) H. J. Jackson(ed) : Samuel Taylor Coleridge (The Oxford Authors), pp. 697－8

(11) 「イメージ」pp. 177－181

(12) E. H. Coleridge. p. 216

(13) 「イメージ」pp. 436－9

(14) 同　上，pp. 506－8

(15) 同　上，pp. 260

(16) 同　上，pp. 698

(17) 同　上，pp. 297－9

(18) 同　上，pp. 466－8

(19) J. E. Girlot : A Dictionary of Symbols, Routledge & Kegan Paul (1971)

(20) 「イメージ」p. 440

(21) 同　上，pp. 433－4

(22) E. H. Coleridge p. 216

(23) ibid. p. 217

(24) 「イメージ」p. 689

(25) 同　上，pp. 217

(26) G. N. リーチ着，国廣哲彌訳「意味と英語動詞」大修館（1976），p. 36

(27) 「イメージ」pp. 686－7

(28) 同　上，p. 545

(29) 同　上，p. 276

(30) 同　上，pp. 183－4

(31) 同　上，p. 637

(32) 同　上，pp. 243－5，250－1

(33) "Preface(1816)", in E. H. Coleridge, pp. 213－5，"Ancient Mariner"，Ⅱ，135 [139]

(34) John Colmer(ed) : "Coleridge : Selected Poems" (New Oxford English Series) ; OUP (1967)

(35) アラン著作集 5，芸術について　白水社（1960）

References

H. J. Jackson(ed) : Samuel Taylor Coleridge, Oxford University Press, (1985)

Sister Eugenia Logan(ed) ; A Concordance to the Poetry of S. T. Coleridge, Peter Smith, Gloucester, Mass., (1967)

Oxford English Dictionary (13 vols)

Shorter Oxford English Dictionary

H. C. Wyld : The Universal Dictionary of the English Language, Routledge & Kegan Paul, London (1952)

Camill Paglia : "Christabel", in Samuel Taylor Coleridge (Modern Critical Views), Chelsea House Publishers (1986)

昭和63年11月30日受付
平成元年 3 月16日受理